タイ王国自治体間協力及び
自治体サービス基準向上プロジェクト
ストーリーテリング事例集

2008 年 10 月

報告者　平山　修一

長期専門家（自治体間協力調整）

目　　次

	項　目	頁
1	自治体間協力とは	3
2	プロジェクト概要	4
3	事例紹介	9
3-1	「ご近所力を取り戻せ！」 コカ郡コカ町セント村村長　ソムチャイ氏の場合	9
3-2	「夫婦で支えた黎明期」 プルワクダン郡ラーハン・タンボン自治体助役　ソムキアット氏の場合	13
3-3	「地元で生きる」 コカ郡コカ町環境課課長　チャワン氏の場合	17
3-4	「清廉潔白」 コカ郡コカ・タンボン自治体助役　ボンゴット氏の場合	21
3-5	「希望を持って生きられる社会を作りたい」 コカ郡コカ町長　ペンパック氏の場合	25
4	あと書き	30

1. 自治体間協力とは

日本では多くの市町村が隣接する市町村と共同で行政事務を行なっています。ごみの収集や消防、上下水道、学校給食、葬祭センターなど日常の様々な場面で皆さんが利用する施設やサービスの多くは自治体間協力によって運営されています。

簡単に【自治体間協力とは?】を説明しますと、「自治体同士がその持ちうる資産や設備、情報を提供し合って共同で行政サービスを行なう」事と言えます。

市町村がお互いお金を出し合って、施設を共同で運営したり（一部事務組合や広域連合）、自分の自治体の消防事務を他の自治体にお金を払ってお願いしたり（事務委託）、話し合いによって共通のルールを作ったり（協議会方式）、など様々な形の自治体間協力があります。

ひとつの自治体では限られた予算と設備、人員の為、住民の皆さんに対して十分な行政サービスが提供できない場合が数多くあります。その住民の為の行政サービスを少しでよいものにして、より効率的に住民の皆さんの税金を使う為には自治体間協力は欠かせません。

日本の歴史を紐解きますと、日本の自治体間協力の始まりは明治時代と言われています。明治時代日本の自治体数は約 7 万ありました。その数多くの自治体設置の理由は、いち早く戸籍を作る、つまり日本と言う国のどこに誰が何人ほど住んでいるかを把握する為でした。そしてこの作業が終わると自治体の合併が進められました、それが明治の大合併と呼ばれるものです。

元々の7万のムラやマチは自然発生的な村や集落でした。つまり明治革命前にはその地域毎に地域を支配する宗主が自治権や通貨権をもっていました。それは支配者に対する年貢支払いを基礎とした集団でありました。今でもそのムラやマチの名前は住居表示として残っています。

この明治の大合併時には、必ずしも合併と言う道を選ばない自治体もありました。そうした自治体は組合を作って小学校運営などの行政事務を共同で行ないました。それが自治体間協力の始まりです。

時は移り、昭和の自治体間協力の主な対象業務はし尿処理と廃棄物処理でした。これらは日本では元々資源として考えられており、専門の回収業者によって取引されていました。しかし、1950 年代の朝鮮半島での戦争を受けて、大量に出る兵器のスクラップ（良質の鉄）が大量に日本に持ち込まれ、国内の廃棄物業者は商売にならなくなりました。

し尿にしても戦後の食糧増産の為、大量の安価な化学肥料がアメリカより持ち込まれ、その再利用価値を失いました。

こうして商品価値が無くなったこれらのものの処理は【迷惑な物の処理】として自治体業務になって行ったのです。これらの業務は財政規模の小さな自治体には大きな負担となりました。そこで自治体はその対策のために自治体間協力を進めていったのです。

このように日本の自治体間協力は長い歴史があります。この日本の経験をタイに伝え、地方分権が進むタイの自治体のサービスの向上に努められないかと考えたのが当「自治体間協力および自治体サービス基準向上プロジェクト」なのです。

それでは次にプロジェクトの簡単な紹介をしましょう。

2. プロジェクトの紹介

JICA はタイの内務省自治体振興局をパートナーとし 1999 年より地方行政能力向上分野の協力を始めました。

2000～2002 年には、「日タイ共同研究プロジェクト」を日本とタイの大学関係者が中心となって行い、その結果、今後のタイ行政の課題の 4 つの中の1つとして自治体間協力が検討されました。そしてそのプロジェクトの最終報告書の中に自治体間協力により住民に裨益する活動を促進させる政策及びガイドラインの必要性が提言されました。

この提言を受け、2003 年 9 月より 1 年間「自治体間協力プロジェクトフェーズⅠ」が実施され、自治体間協力の様々な可能性が検討されました。そしてそのプロジェクトのフェーズⅡとして自治体間協力のための具体的な手続きをまとめたマニュアルを作成する為に、当プロジェクトが行われました。

プロジェクト概要

案 件 名：自治体間協力及び自治体サービス基準向上プロジェクト（Capacity Building for Local Authorities through Local Public Services Standards and Local Cooperation）

協力期間: 2005 年 10 月 ～ 2008 年 10 月（3 年間）

相手国機関名: 内務省自治体振興局（Department of Local Administration, Ministry of Interior）

協力機関：総務省自治行政局、長野県、荒川区、大阪市立大学、京都大学

上位目標：タイの自治体が公式の自治体間協力を設立し、資源や便益を共有することにより、広域における行政サービスを提供することができるようになる。

プロジェクト目標：公式の自治体間協力のパイロットプロジェクトが実施されることを通じて、地方自治体振興局が各自治体に普及する地方行政サービスの基準や自治体間協力の具体的な手続き・ガイドラインが形成される。

期待される成果：

1. パイロットプロジェクトに参加したタイ自治体関係者が自治体間協力の設立・運営にかかる手続きや課題対応策を習得する。
2. パイロットプロジェクトにおける教訓を踏まえて、タイにおける公式の自治体間協力の設立・運営のためのガイドラインが作成される。
3. 上記2つの成果を踏まえて、公式の自治体間協力の設立・運営を促進させるための地方自治体振興局の役割・機能が明確化される。

当プロジェクトの公的な成果

- 2007 年憲法第 283 条に自治体間協力に関する項目が盛り込まれました。
- 2009 年制定予定の地方自治法典の主要な項目（6 項目）の一つに、【自治体間協力】が盛り込まれる見込みとなりました。
- 2006 年に【自治体間協力に関するガイドライン】という内務省通達を公布しました。
- 2008 年内務省自治体振興局編纂「自治体間協力マニュアル」を全地方自治体に配布しました。
- パイロットプロジェクトにおける公式な自治体間協力センターが運営され成功しました。

プロジェクトの具体的な活動

簡単に言えば、当プロジェクトは2つの活動を両輪として行いました。

一つは【制度設計】、自治体間協力を公式に行なうための法整備、ガイドライン整備、マニュアルつくりを行ないました。

もう一つは【パイロットプロジェクト運営】、実際にタイ国内に自治体間協力活動を行い、その活動を成功に導き、その活動から学んだ教訓を制度設計にフィードバックしました。

この2つの活動、単純に分類すれば【制度設計】という**トップダウンアプローチ**と【パイロットプロジェクト運営】という**ボトムアップアプローチ**を組み合わせてその相乗効果を計っているのが、このプロジェクトの特長とも言えます。

それではプロジェクトサイトとして 3 年間活動を行った場所の一覧表をご覧下さい。

プロジェクトサイト一覧表

県名	地域	協力形態	協力内容	サイトの活動内容
Rayong （ラヨーン県）	工業団地の多い小規模自治体	8中規模自治体の連携。	インフラ整備 （道路補修）	街灯修繕事業、 緊急道路補修センターの運営など
Kanchanaburi （カンチャナブリ県）	カンチャナブリ市とその周辺自治体	中規模市と 3 小規模自治体との連携	消防連携	消防センター運営、 消防ボランティアの共同訓練など
Lampang （ランパン県）	コカ町とその周辺自治体	小規模市とその周辺の 3 小規模自治体との連携	ゴミ行政	ごみ分別啓蒙、収集業務、最終処分場の共同運営、 ゴミリサイクルセンター運営など

それでは、個々のパイロットサイトの活動を見てみましょう。

1. ランパン県コカ郡コカ町を中心とした廃棄物共同管理センターの概要

	構成自治体名		範囲	人口			村数
			Km2	男性	女性	合計	
1	Koh-Kha（コカ町）	テッサバーン・タンボン	3.95	2415	2737	5152	8
2	Koh-Kha（コカ）	タンボン・自治体	15.00	1833	1906	3739	8
3	Thapha（タパ）	タンボン・自治体	15.00	2975	3142	6117	9
4	Sala（サラ）	タンボン・自治体	22.00	2916	3176	6092	7

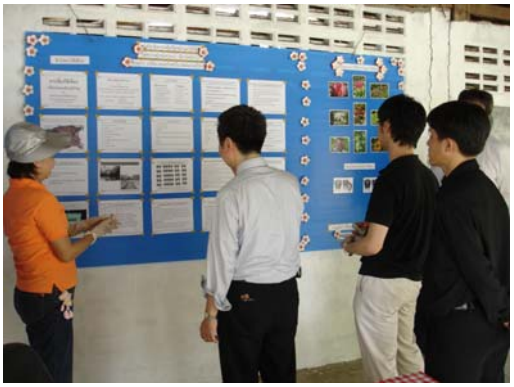
コカ廃棄物共同管理センターの設立年月日は 2006 年 6 月。コカ町に事務局をおいています。

このセンター運営方針は、1.廃棄物管理における共通ルールの作成、検討、運営、2.活動理念の共有、活動指針の共有、3.各自治体は理念や活動方針に基づき、自治体の事情に合わせた形で活動を行うとなっています。

活動内容（一部抜粋）

1. ゴミの分別及びごみ分別に係る住民集会
2. ゴミリサイクルセンター（通称ごみ銀行）プロジェクト
3. リサイクルゴミ共同販売
4. ゴミ袋有料化及びエコバックプロジェクト
5. ゴミ最終処分場の整備
6. ミミズによる生ゴミの肥料化
7. 生ゴミのペレット化
8. 広報パンフレットによる啓蒙活動
9. ごみ収集車の共同使用

写真：ミミズを使った堆肥作り



写真：ミミズを使用した生ゴミ堆肥化説明

写真：セント村（コカ町）のゴミ銀行運営スタッフと

2. プルワクダン郡インフラ補修センターの概要

	構成自治体名		範囲	人口			村数
			Km2	男性	女性	合計	
1	Chompol Chaopraya （チョンポルチャオプラヤー町）	テッサバーン・タンボン	2.84	787	809	1596	4
2	Pluak Dang （プルワクダン町）	テッサバーン・タンボン	2.87	1375	1387	2762	4
3	Mab Yangpom （マープヤンポン）	タンボン・自治体	81.07	2416	2361	4777	7
4	Pluak Dang （プルワクダン）	タンボン・自治体	71.22	1911	2004	3915	6
5	Tasit （タシット）	タンボン・自治体	123.26	2452	2395	4847	6
6	Mae Nam Ku （メーナムクー）	タンボン・自治体	115.00	3778	3906	7684	7
7	Laham（ラーハン）	タンボン・自治体	84.00	1845	1900	3745	4
8	Nong Rai （ノンライ）	タンボン・自治体	155.11	2069	2064	4133	6

プルワクダン郡インフラ共同補修運営センターの設立年月日は 2006 年 6 月。その事務局はプルワクダン・タンボン自治体におかれました。そのセンター運営方針は、1.目的と方向性の共有及び活動の調整、2.人材面・予算面・設備機器の効率的な相互利用、3.メンバー間の交流促進、4.住民への行政サービスにおける裨益の最大化、5.各地方自治体の強化を行うとなっています。

活動内容

1. センター直営の各自治体の道路修繕工事発注
2. 街灯修理の共同実施
3. 建設機器の共同購入および共同利用
4. 共通基準の標識の設置（検討中）
5. インフラ緊急予算の設置（2007 年度は橋を修繕）

写真：センターミーティングの様子

写真：センター構成自治体の地図

写真：センター事務局の建物

3. カンチャナブリ市を中心とした災害防止管理センターの概要

	構成自治体名		範囲	人口			村数
			Km2	男性	女性	合計	
1	Kanchanaburi（カンチャナブリ市）	テッサバーン・ムアン	9.16	14969	16526	31495	27
2	Pak Prak（パクレック）	タンボン・自治体	47.80	10320	10948	21268	13
3	Ko Samrong（コ・サムロー）	タンボン・自治体	74.00	3569	3673	7242	9
4	Ta Makam（タ・マカム）	タンボン・自治体	26.25	3754	4197	7951	5

カンチャナブリ災害防止管理センターの設立年月日は 2006 年 6 月。カンチャナブリ市に事務局をおきました。

そのセンター運営方針は、1.予算の節約、2.サービス提供における効率性向上、3.新しい行政サービスの確立、4.住民の生命と財産の安全性の向上、5.サービス提供による住民満足度の向上を行うとなっています。

写真：センター会議の様子

活動内容

1. 消防事業の協力運営（実績 12 回出動）
2. 消防ボランティアに対する合同訓練
3. 火災時の貯水池使用ルール作成（水源地図の共同作成）
4. 各自治体の基礎資料の共有
5. 火災・旱魃対策手引きの作成
6. センター広報パンフレットの作成
7. 消防無線の周波数統一
8. 消防職員の自治体交流の実施（調整中）

写真：カンチャナブリ災害防止センター外観

写真：災害現場での消火活動の様子

3. 事例紹介

3-1.「ご近所力を取り戻せ！」

コカ郡コカ町セント村村長　ソムチャイ氏の場合

「僕はこの家で産まれこの土地で育ったんだ。家は代々農家で、ここから1Km くらい離れたところに水田を持っている。稲作じゃなくて簡単な建設工事を請け負った事もあるんだ。このごみ銀行の建物だって僕が作ったんだよ」

ランパン県コカ町を流れるワン川。その川沿いにある 120 世帯ほどの集落、セント村。現在その小さな集落には毎月、他県からの自治体職員、NGO、大学の調査グループなどがひっきりなしに訪れる。

「この前はバンコクの TV 局の人も取材に来たかな。まだ放映日は決まっていないみたいだけどね、11 月ごろになると聞いたような」淡々としたその語り口には決して浮かれたような様子はない。そこは農民、実直な人柄もあり落ち着いている。

タイの地方自治の最小単位は集落、バーンと呼ばれる。バーンには大体 10～300 世帯の家があり、近年都市化が進む村では 400 世帯もの世帯数にもなると言う。

ここコカ郡では人口分布の二極化が懸念されている。工場の誘致に成功し、新しい幹線道路の元、都市化が進む地域と、ここセント村のように若年層を中心に人口流失が進む地域である。

そうコカはその昔、中東や東アジア地域へ出稼ぎをする人が多いことでも有名であった。しかし現在はチェンマイ市や北部の主要都市の都市化が加速し、雇用が生まれ、そこに働きに出る人が圧倒的に多い。ちなみに村長の兄も例外ではなく長野県に出稼ぎし 15 年を過ごした経験を持ち、今でも流暢な日本語を操る。

「僕には娘が一人居て、もう 22 歳になる。結婚して近所に住んでいるよ。近所の子供達は大体 17～18 歳頃まではここに住みながら勉強して、大学はランパン市か他県に行くんだ。そして大学を卒業したらランパン市やチェンマイ、ランプンで働いている子が多いよ。」

近年、高等教育機関がランパン市やコカ町にも出来た為、多くの師弟は自分の家から学校に通う事が出来る。村長の時代は小学校 4 年間が義務教育、それ以上の教育を受けるのには通学の面から難があったと言う。

見るからに長閑な風景が広がるセント村。その村境をゆったりと流れる川の流れは、まさに村を流れる時間のようである。遠くには牛が水辺に佇んでいるのが見え、草に覆われた川沿いの土手では雛が親鳥をまねて仕切りと嘴を動かしている。

「家の周りにごみが目に付くようになったのは5年位前からかなあ。昔は何か、そうお菓子を包むにも紙を使っていたから、食べた後は燃やしていたんだ。でも今では子供用のスナック、ペットボトル、ジュースの缶がごろごろしている。昔、ジュースはビンで売っていたのにねえ。」

昔のお菓子は自然に帰る素材を使って包装されていた。バナナの葉、紙など、それらは腐って土に戻るか、燃やされて灰となり土の栄養分としてまた自然の循環の流れに戻っていった。

しかし、スナック菓子に代表される工業製品の進出は、ここセント村でも例外ではなかった。それらの包装は自然に土には返らず、いつしか道端や川に投げ捨てられるようになった。

セント村の農民の多くは農閑期に染物を副業として行っている。藍や草木で染められた布はコカ町の業者に高い値段で売れたという。多くの染物を出荷するには多くの人の協力画必要だったであろう。だから、水田より離れた川沿いに集団で居を構えたのであろう。

この家並みと街道の幅はここ 50 年間変わっていないそうである。

「プロジェクトを始める頃かな、ごみは問題だなあと思い始めたんだ。近所の人もそう思い始めていたよ。それはチェンマイで花の博覧会があったでしょ、この工事で発生したごみがランパンで不法投棄されていて、この業者がランパンで捕まったんだよ。この一件で皆、ごみ問題は人事じゃないとおもったんだ。」

2005 年、チェンマイで花と緑をテーマにした国際博覧会が盛大に行なわれた。「自然との共生や環境保護」をテーマにしたこの博覧会には多くの国々から多くの観光客が訪れ、その展示の見事さを堪能した。

しかしその裏で、博覧会会場の工事によって発生した産業ごみは近隣の県に不法に投棄されていった。工事発注者のチェンマイ市は市内の民間業者にその廃棄を委託したのだが、その業者が適切に処理をしなかった。

「その頃、コカ町から JICA のプロジェクトの話を聞いたんだよ。それで最初はわけも分らず話を聞きにいったんだ。」

プロジェクトでは各サイトでの活動開始前にセミナーを行った。これは各サイトの関係者を一堂に集めてワークショップを行い、それぞれのサイトで何が今問題と成っており、何をプロジェクトの活動として行うかを決めるものであった。

セント村の村長はこのワークショップの後、当時画期的なごみ処理と評判であったピサヌローク市に村民数十名と一緒に視察に出かけたという。ピサヌローク市ではごみ回収業で有名なウォンパニット社への視察がとても印象深かったという。

「ピサヌロークを見てきた住民が『あれなら俺達にもできるなあ』と言っていた。この程度なら自分でも出来ると思うことが重要なんだよね。」この視察がきっかけとなり、コカ町の支援を受け、ごみ銀行（リサイクルごみ分別回収販売センター）を設立する事となった。

多くの村がそのごみ銀行の活動には興味を寄せる。しかし、その活動が実際に行なわれない一番の理由は、どこにごみ銀行を設置するか住民の合意が取れないのである。

「この集落には公共用地がないんだ。だから僕は自分の家の敷地を開放したんだよ。こうしてごみ銀行として使うことには何の抵抗もないよ。だって他の家が広い土地を持っているわけではないからね。だから地域の場所として村長が自分の土地を開放するのは当然の事でしょ。」

「他の村も同じことをしようと思ったらしいけど、住民の協力が得られないみたいだね。ごみに対する意識が低いんだろうなあ。住民が興味があっても村長がそんなことしないよ、と言っている村もあるし。」

こう言い切る村長だが、活動を始めた当初はごみ分別の意味をよく分かっていなかったと言う。熱心に働きかけるコカ町の職員に共鳴し、どうもそれは良い事らしいと、あまり深く考えないで行動に至ったらしい。

「ここの集落のそれぞれの家庭は自分の家の前をキレイにする義務があるんだよ。僕も朝、運動がてらに集落を散歩するんだけど、その時にごみが落ちていないか見て回るんだ。もしごみがあったら即拾ってゴミ箱にいれるようにしている。」

公共心、こんな堅苦しい言葉は村長には似合わないであろう。下駄履き感覚で自分の出来る事を率先して行なう。ただそれだけの事であるが、それを続けられる人はそんなに多くはない。

「最初はごみ銀行を始めてよくその効果が分らなかったけど、今まであまり話さなかった住民と話す機会が増えたり、世間話をするようになり、多くの村民との関係が良くなったように思えるよ。」

「ごみ銀行の活動は特に主婦グループのサポートが大きいね。これは嫁さんと娘のおかげかな。こうした主婦の繋がりが昔からあったのがうまく活動が進んでいる元になったのかな。」

インタビューの傍らで作業をしながらこちらを伺っていた村長の奥さんが、少し恥ずかしげに村長の顔を見つめていた。最近、奥さんも近所の奥さんからよく声をかけられるという。「住民間の共通の話題が出来ましてね。。。」奥様方の井戸端会議でもごみ分別の話をしていると言う。

「子供にはね、今は町役場の要請があってね、何個かの学校にごみの分別を教えに行っているよ。これは主婦グループが中心になっているけどね、。子供に関しては『ごみを投げ捨てる＝恥』という意識が浸透しつつある。子供達もごみをゴミ箱に捨てるのも面倒くさいと思いつつも、その辺に捨てる勇気がないから、ちゃんとゴミ箱に捨てるようになった。これはいい事だ。」

村長は今では町内にある2つの学校に毎週のように主婦グループと出かけては、ごみの分別について講義や実践指導をしている。数ヶ月前からこのコカ町内の 2 つの学校では学校内にごみ銀行を設置した。村長はその2つのごみ銀行の名誉頭取だそうである。

「子供にもね、ごみはお金だよといっている。そうすると子供はとても分別に興味を示すんだ。それを見てその子供の親の世代もそうしている。こうしてごみの投げ捨て＝恥ずかしい事という意識が集落で浸透しつつあるよ。」

自然体。しかし農民らしく地道にこつこつと日々積み重ねていく。そんな姿勢が何れ、地域の子供達の意識を変え、住民のごみに対する意識も変えていくのであろう。

「僕の将来の希望ってかい。治安がよくて住み易い町を作ることだよ。近所の人の仲がよくて、いろいろ助け合えたり、お互いが気さくに声を掛け合えたりね。その為にならごみ屋と呼ばれたってい

い。」

そんな自然体の村長。ごみ銀行の収益は銀行の株主である住民に均等に配当をしている。また地域の子供達の就学資金の一部にと、収益の一部を奨学金にしている。

「今ではごみ銀行による村民の所得も月 200～300 バーツになる。これは一ヶ月の電気と水道料金をまかなえる金額なんだよ。」月収 1 万バーツ以下の世帯が多いセント村。まさにごみは宝と言うべきであろう。

一人の人間が自ら行なえる事は余りにも少ない。だからこそ地道ながら理解者を増やしていく必要がある。そしてその人の輪が、同じ方向性を持ったときに住む人の意識までも変えていく。

そんな当たり前のことを改めて村長に教えられた、そんな気がした。

3-2.「夫婦で支えた黎明期」
プルワクダン郡ラーハン・タンボン自治体助役　ソムキアット氏の場合

ここはラヨーン県プルワクダン郡。19 世紀前半より、中国からの開拓民が多く移り住んだ海沿いから少し離れた台地である。名産品はドリアンやパイナップル。乾いた台地が延々と広がるプルワクダン郡は水はけの良い土地としても知られる。

水は生活と切っても切り離せない関係にある。元々雨量の少ないプルワクダン郡は多くの人口ため池を持っている。人々はため池に近い台地でキャッサバやサトウキビを生産し、標高の低い場所に用水を引き、町を作った。

古くからの住民は言う「最近水害が酷いんです。以前では考えられない水量が一度に襲う。これによって古い橋など簡単に流されてしまう。これらの修理代は単独の自治体では難しいのです」。

プルワクダン郡では毎年水害の被害が多く、特に近年に工業団地として開拓が進んだメーナムクー・タンボン自治体では大きな被害が確認されている。

水源が近く水はけの良い台地は、バンコクに近いというその立地条件もあり、工業団地用地としては最適であった。チョンブリ、アユッタヤーを手始めに工業団地を展開していた日本企業も、今はこのラヨーンに工業団地を建設中である。工場誘致はメリットも多いがデメリットも多い。

大型車両が引っ切り無しに通る道路は痛みが激しい。また以前は農業用水として利用されていた水の多くが現在では工場で使用され、その工業排水は水下の町の方に流れている。現在、これらの代償は自治体が追う羽目にある。

「インフラ補修は必然的だったんです」そう語るのはラヨーン県プルワクダン郡ラーハン・タンボン自治体の助役ソムキアット氏である。

「道路が傷むのはトラックが原因です。しかしそれを企業だけが原因とは言い切れません。そうなると自治体が直すしかないんです。道路の補修には多くの資機材が必要になります。とてもお金のかかる作業で、しかも私の自治体にはこの専門職員がいないので、補修がちゃんと行

なわれたのかどうかが確認できないんです」。

2002 年の地方分権推進法は国家の歳入の 35%を地方に移譲する事を定めた。それに沿って多くの業務が国から地方自治体に移譲されたが、多くの自治体にとって、それは業務の負担が重くなる事を意味していた。

タイの自治体の職員数は日本と比べて少ない。その理由の一つに自治体歳入の 6 割までしか人件費として支出してはいけないというルールがあるからである。これには議員報酬も歳出に含まれるので、財政規模が少ない自治体にとっては、議員は多い割に事務職員が少ないという状況になりやすい。

プロジェクト開始当初、ソムキアット氏は自治体間協力センターの議長自治体を努めるプルワクダン・タンボン自治体の助役を、妻は同タンボン自治体の会計役を務めていた。

「この JICA プロジェクトは『これは住民に直接裨益がある』と私は気に入りました。でも、メンバーの多くは、最初のワークショップの後の帰り道で『プロジェクトなんて面倒だ、嫌だ嫌だ』と言っていた事を思い出します」

プロジェクト開始前、ここプルワクダン郡でのワークショップは一応に重苦しい雰囲気であった。「単に業務量が増えるだけじゃないのか」、「中央政府の押し付けか」、「また合併推進を考えているのでは」。

とはいえ多くの自治体では歳出の約 6 割を占めるインフラ関係のプロジェクトには関心がないわけではなかった。

「基本的に他のメンバーは直ぐ機材を買いたがる。この方が目に見えるので分りやすいからね。物を買うよりも先にやることがあると思う。先に言った様に国道を管理している事務所と研修を共同で行なうなど、物を買わなくても幾らでもやる事はある。」

大半のメンバーが自治体間協力の意義を分ろうとせず、目先の資機材購入に走りがちになる。このメンバーに対して抑止力となり、話しかけ、そして公共の為にどうしたら良いかを熱く語っていたのがソムキアット氏である。

地元出身の彼は、第二次世界大戦後にタイに移民してきた中国人の父親とカンチャナブリ出身のタイ人の母親を持つ。

「私の父は中国人です。彼はご他聞に漏れず商売に熱心で、公共心と言う物は持っていなかったと思います。また家が忙しいので、私はあまり親に構ってもらった記憶がありません。しかし私は小学校の時、当時の先生に本当に多くのことを学びました。彼によってその後の人生が変わったといっても過言ではありません」

恩師によって公共意識を強く植え付けられたソムキアット氏。大学生活、そして銀行員時代をバン

コクで過ごした。しかしバンコクでの生活に疑問を持ち始めた頃、地元で助役の公募があり、これを受けようと一念発起、無事合格したそうである。

「バンコクは雑踏が嫌いで、、、人が多くなんだか落ち着かない場所だった。そのうち地元に帰りたいという意識が日に日に強くなったんです。バンコクに居た時は夜中の 1 時や 2 時がまるで田舎の夕方 7 時や 8 時のような感覚で常に忙しく自分の為の時間など在りませんでした。」

彼は、プロジェクト開始から数ヶ月後、日本への研修に参加した。内務省、他県のプロジェクト関係者に混じってプルワクダン郡からの唯一の参加者として、長野県を中心に多くの事を学んだ。

日本での研修は意義が大きい。百聞は一見に如かず、まさに研修前と研修後ではその考え方までがらっと変えてしまう人も出るくらいインパクトの強いものである。しかし知ってしまった者の悩みというべきか、帰国後日本とタイの自分を取り巻く環境との落差にジレンマを抱える人も多いと聞く。

「本邦研修に最初一人でいった時は、何で僕は一人なのかと思いました。絶対もう一人一緒にプルワクダン郡から行くべきだった。僕が日本で見たものを幾らロで説明しても、他のメンバーは理解してくれなかったからだ。」

孤軍奮闘する彼。しかし理解者は増えず、辛い日々が長かったという。自分は見て知っている。しかし相手は理解してくれない。そんな中、彼はセンター秘書を辞めると会議で宣言したが、他のメンバーの慰留もあり思い留まったと言う。

「そりゃあ何度もこの活動を辞めようと思いましたよ。あまりにもほかのメンバーが自分の利益を考えて行動するからね。私達夫婦の間でもこのプロジェクト活動と言う物はもっと崇高なイメージがあったんです。しかし参加しているメンバーの多くは公共の考えを持っているわけではないんです」。

しかし辞めなかった。孤軍奮闘だと考えていた彼には強力な理解者が居た。それが妻のスーダラットである。一般的に南生まれのタイ人は一本気だと言われる。ソンクラー育ちの彼女も同様曲がった事の嫌いな正義感であった。

「夫は本当に優しい人です。このプロジェクトが始まってからは結構悩んでいる顔を見せる事が多かったです。でも私達は夫婦喧嘩を殆どしないですよ。暴力は解決策にならないと分っているから。心からこの人と一緒になってよかったと思っています。」

「私達夫婦の共通の話題が仕事の事なんです。このセンターの活動も一緒に働き、共通の話題が出来たので本当によかったと思います。今でも妻は一番の大切な良い話し相手です。プロジェクトを

進めていて辛い時期は確かにありました。でもあまりネガティブに受け取る事は少なかったです。夫婦でよく、『願わくばこうなるべき』でも実際はこうなっちゃった、じゃあどうしようか、このような話を良くしていました。」

一般的に先駆者は報われない。その努力の割には、先駆者ゆえ、周囲より疎まれその地位を追われる。そして後発者がその先駆者の功績までも持っていく、このようなケースが非常に多い。

ソムキアット夫妻も結果的にプロジェクトが始まって 2 年目、突然所属していたプルワクダン・タンボン自治体から他の自治体へ移動を通告された。そしてプロジェクトは現在 3 年目、センター議長が代わり、センター事務局も他の自治体に移動。彼ら夫婦は役職もない一般の委員としてセンター会議に出席し続けている。

2007 年 8 月。不幸にもラヨーンのプロジェクトサイトでは自治体首長の一人が何者かに銃殺されるという事件が起きた。未だ犯人が捕まっていないが、タイではまだまだ力によって自分と異なる意見を封殺する事がしばしば行なわれるという。

この首長の葬式にはセンター活動に関わった全ての自治体首長、助役が出席し、交わす言葉こそ少なかったものの、タイで自治体運営をするリスクを肌で感じているようであった。ソムキアット氏はこの場でその決意を強く持ったという、「決して屈しないと」。

「タイはまだまだ何か行うにしても時間がかかるんです。社会基盤整備をするにしてもこれはポイントポイントで考えるとそれぞれ一部の人しか利益を請けていないように見えてしまいます。だから継続して行なわないと多くの住民が裨益を受けた事を理解しないのです」彼は後悔がないかのごとく、さばさばした口調で語った。

プロジェクトは開始後 3 年を過ぎようとしている。プロジェクトの推進役であった JICA やタマサート大学は、契約期間が切れる為、プロジェクトを何れは去っていく。しかしながらプロジェクト活動は活発さを増し、順調に進んでいる。そして最近では自発的に廃棄物管理の MOU を締結する動きを見せ、ごみ最終処分場用地の購入の検討を行なっている。

プロジェクト開始当初、プルワクダン郡の月例会議といえば怒号が飛び交う修羅場であった。会議途中で怒って席を立つ出席者、かみ合わない主張、そして遅々として合意しない活動内容であった。

そんな中、孤軍奮闘して会議を成立させるべく積極的に動いていた彼。何がそこまで彼を駆り立てたのであろう。下手をすれば身の危険すら降りかかったかもしれないというのに。

「私は近所の人たちとの助け合いがあればいいなと思っています。そして暮しやすい社会造りに貢献したい。そうすれば寂しい思いをすることがないでしょう？年末には家を貸している店子を集めてパーティをしています。店子を助ける事は回り回って自分達のところに徳が帰ってくるように思っています。家を貸す行為は利益重視ではないんです。仲良しの集落を作って穏やかに暮したい、それだけ

なんです」

地元への純粋な思い、それが彼を突き動かし、結局は理解者を増やし、現在の成果に繋がったのであろう。

「パーティの賞品は家賃一ヶ月ただ！なんていうのがありますよ」

遊び心を忘れない彼を支えたのは、公私共に彼のよき理解者の妻である。夫婦の絆が地域を変える、そんな良い事例を見せてもらった気がする。

3-3. 「地元で生きる」
コカ郡コカ町環境課課長　チャワン氏の場合

21 世紀は地球温暖化との戦いであるといわれている。これは人々の意識面でもそうであるし、また物理的にも地球温暖化の影響は待った無しの状態にある。炭素ガスの大量排出、ごみ問題、利用可能な淡水不足などこれらの多くの諸問題は直接住民の日常生活を襲う。

近代化に伴う価値観は「大量消費・大量廃棄」のアメリカ型資本主義モデルをお手本に世界中に蔓延していった。これらの価値観は多くの人々に刷り込まれ、いつしか人々は自分達の生活や文化に価値を見出せなくなっていった。

コカ町環境課のチャワン職員は公衆衛生業務一筋 25 年のベテランである。地元出身、地元育ち、地元出身の妻と結婚し、今では地元の町役場で働いている。そんな彼がごみ問題を身近に感じたのは 5 年前からだと言う。

「住民がごみのことを認識し始めたのが、丁度 5 年前でした。隣接自治体のごみや他県のごみが町に流入し始めたのも同じ 5 年前でした。チェンマイのごみはプレー、チェンライなどでも不法投棄されていました。チェンマイ市内の処分場で地域住民のクレームが激しく市内にごみが捨てられなくなり、他県に投棄したのが問題の原因です。」

その時期は奇しくもランパン市に外資系量販店が進出した時期と重なる。大量のプラスティック製の容器、ビニール袋は人々の生活に入り込み、そして捨てられていった。

「ごみ問題は地域共通の問題です。いくら町がごみ対策専門の職員を配置したとしても、外からのごみには対応できない。自助努力にも限界がある。その為、周囲の自治体から入ってくるごみの量を減らす必要がありました。」

自分達の問題は分っている、しかしそれを変えるきっかけが欲しい。そのような状況下、自治体間協力手法の事を聞き、プロジェクトに参加した。

「プロジェクトは周りの村が同じ課題に対して同じ方向性を持つ、つまり分別ごみを推進してごみの総量が減るという大きなメリットがあります。またプロジェクトが始まるまでは町でも分別ごみは行なっ

ていませんでした。」

チャワン氏は元々保健所で働いていた。稲作を営む両親の元、5 人兄弟の次男。比較的勉強が出来た彼は、将来の目標を当時地元にある唯一の役所、保健所で働く事を考えていた。

「ピサヌローク公衆衛生単科大学で学びました。その後ランパン県の公衆衛生局の下部機関、メープリックン公衆衛生局保健所で働いていました。次のホイキーノック保健所という所は森の中で何もないところでした。コカ町は 2004 年から働いています。」

タイにおける保健所の役割はとても草の根の役割である。衛生区の業務、伝染病対策、小～高校生に対する初期の公衆衛生を行なうだけではなく、安全な食事の提供や公衆トイレの整備なども行なう。

「住民に対する指導も行っていました。保健所は初期治療や衛生教育の2つの仕事を担当していました。外に行ったとしても残業をしなくてもすんでいました。実際には保健所で残業が無かったというよりも、予算が少ないから残業代を申請しないで働いていたという方が正解かな。保健所の予算は、厚生省からくる予算が少ない事と、住民からの扶助費を集めていましたが、この金額がとても少ないので、予算が無く、給料は安かったです。」

そんな彼は何度も地元コカ町への配転願いを出すもそれが受け入れられることもなく、結局は保健所を辞める事となる。

「保健所を辞めてマヒドン大学で学士をとったんです。その頃、保健省の機構改正で研究職を募集しました。同じ頃に地方分権が始まり、自治体が設立され始めました。どちらをとるかの選択を迫られたんです。

どちらがより結果を出せるだろうか、自分はその選択をする際に自治体のほうがより良い仕事が出来るだろうと考えました。より住民に近い立場でね。それでランパン市に就職したんです。その時のタイトルは衛生区の研究職でした。」

結局、地元で働く夢はまたもかなえられず、彼はランパン市で 4 年間勤務する事となる。研究職と言うタイトルで就職をしたものの、当時彼に与えられた業務は露天商の取り締まりであった。

「物売りが衛生的に良くないので彼らへの指導をしていた為、とても大変だった。生鮮市場と衛生区の研究職なので、指導も自分の仕事の範囲になるとされたのです。公共の場所、つまり私的利益の為に商売をしてはいけない場所で彼らは商売を始めた為、これを取り締まらなければいけなくなりました。そして県知事の命令で、私がこの対策員として任命されてしまいました。これはとても辛い業務でした。」

その時、コカ町で公衆衛生関係のマネージャークラスの募集があり、彼は応募し合格。今に至る。念願の保健所勤務とはならなかったが、地元で働ける事になった。ちなみに現在、彼の妻は皮肉にも

コカの保健所所長をしている。

都市化が進むランパン市と牧歌的なコカ町。その住民のクレームの数や内容はかなり違いが見られるという。大まかな苦情の数を数えると、ランパンの苦情を 100 件とするとコカはせいぜい 5 件にしかならない。

「コカ町では養豚場の糞の悪臭に関する苦情かな、これは住民にはブタを市場に出すための 3～4 ヶ月の猶予を貰い、養豚場には市場に出した後には、もう飼わないという約束をさせた。また違う苦情は、砂糖工場の周りで、サトウキビの搬送による粉塵、3 年間でこれくらいです。」

そんな彼の経験は決して無駄ではなかった。自治体間協力センターを構成する自治体のうち、サラ・タンボン自治体の首長は活動に反対こそしないが、協力的ではなかった。しかし人口も面積も大きいこの自治体のごみ問題を解決しないと、センターの活動としては失敗であった。

「センター活動で住民集会をしていて大変だった自治体はサラでした。住民集会に人が全く集まりませんでした。あとは住民の多くが都市型生活になっている為、住民集会に参加する時間さえ取れなかった人も少なくなかった。

私はサラ保健所に居ましたので基本的にはよく知っている地域でセンター活動をしていることになりました。合計でこの地域に 8 年ここに関わったでしょうか。当時住民の初期医療指導をしていたので住民にとっての私は【助けてくれる人】という位置付けでした。これが住民の理解を得られた大きな要因かな。」

彼と一緒に住民集会に出た事がある。穏やかで控えめな彼なのに、住民の多くは同行者の政治家には目もくれず、彼の元に駆け寄った。彼はそんな住民の声をかみ締めるように一つ一つ優しく聞いていたのが印象的であった。

「先ず、活動を始める前に、私は知人を中心に話を積極的にするようにしました。自分はここで長く住んでいるし、学校時代の知り合いも多いからね。仕事をする環境としてはこれ以上無いくらいの環境だ。今でも妻の保健所の活動には私も同行し顔を売っています。」

プロジェクトの成功には近道はない、地道な努力の積み重ねが、いつしか大きな花を咲かせる。まさに地道な人柄にぴったりである。

「市域の中で言えばリサイクルごみの分別は 100%、生ごみの再利用率は 50%だと思います。リサイクルごみはごみ銀行にすれば裨益が大きいが、ごみ銀行にしなくても問題は起きないと考えている。」

リサイクルごみの回収は北タイでは一般的である。小規模なら地元の回収業者が、大規模ならば

ピラヌロークに本社があるリサイクル会社が回収に来る。ごみ銀行にするメリットはスケールメリット。つまり分別の度合いが細かく、量をまとめるとそれだけ高値で業者に販売できる点にある。

彼はごみ銀行が成功したセント村を以下のように評価している。

「セント村と他の村の違いはね、村長の存在が大きい。あそこは村長がごみ分別事業に対しての理解が深い。セント村の村長はボランティア精神が高い人だった。これが成功の原因だと思う。」

センター活動をする前からコカ・タンボン自治体の助役とは交流が深かったと言う。またセンター構成自治体であるタパ・タンボン自治体の助役は妻の友人だそうである。このような個人的な信頼関係をベースにプロジェクト活動はスムーズに進んだという。

「プロジェクトの効果は単にごみの総量が減っただけではありません。共同している自治体同士で共通の問題を持っているという仲間意識が芽生えた。一緒に考え、一緒に解決することがモチベーションとなった。今ではチームワークも良く、お互い頼れるパートナーとなっています。」

彼は自治体間協力センターは単なる仲良し倶楽部ではいけないと指摘する。

「今後の課題として住民全員に活動のことを理解させる必要がある。大切なことは人が変わっても残るシステムを整備し根付かせる事である。そして継続的に発展し成果が出ることだと考えている。」

現段階の首長は理解があり、活動を順調に進められる。しかし一旦首長が変われば多くの場合、方向転換を余儀なくされる。そんな苦い経験が彼にこうした思いを植え付けたのであろう。

「夢は何ですか？って言われてもね。。。正直なところ少し休みたいです。趣味も特にないですよ。」

言葉に焦りがない。彼は発言や動作に無理がないのが印象的である。自分に無理をし、自分を鼓舞すると一時的には良い成果が得られるかもしれないが、継続させる事は難しい。無理無くこつこつと、これが簡単な事のようで難しい。

好きな言葉は「‥‥ないなあ。。。」という自然体の彼。そんな彼に大事な物はなんですか？と聞いてみた。

「私にとって大事な物は家族です。家族にお金持ちとしてではなく、地位や名誉に関わりなく、暖かい家庭があるというのが僕にとっての成功であると考えています。」

地域と家族を愛する彼は、きっと良い仕事をするだろうと、自然に思えた。

3-4. 「清廉潔白」
コカ郡コカ・タンボン自治体助役　ボンゴット氏の場合

公務員の汚職は途上国にとって共通の課題である。東南アジアでは閣僚級のみならず、普通の公務員のレベルでも業務に対してマージンを要求する事が一般的である。タイでは比較的、公務員のモラルは高いとされているが、一概には言えない。

「私は清廉潔白ですのでなんでも聞いてください」開口一番こう切り出したのはコカ郡コカ・タンボン自治体の助役、ボンゴット女史である。短めの髪、がっしりとした体躯、への字に曲がった口元はその意思の強さを表しているようである。

「私は前の職場（チェンマイ県のある自治体）で上司（首長）と大喧嘩をしてクビになりました。その理由は、その時の首長が不正をしていた事を正したからです。私は彼の不正を見過ごせませんでした。そこで私、助役室の職員、住民で共同して自治体行政の紳士規約を作ったんです。これが首長の逆鱗に触れて喧嘩となりました。」

タイで自治体の助役になるのには国が実施する一斉試験を通過しなくてはいけない。つまり助役は国家がその資格を認めた役職である。対して首長は 2002 年より公選、つまり住民の直接選挙で選ばれる政治家である。自治体の運営はあくまでも首長の意向が【住民の声】として力を持つ。

「その時に私の部下が５～６人いましたが、私が助役を辞めさせられた時に、部下全員も違う自治体へと移動しました。私はその事を県助役に陳情しました。県助役は私と似ているタイプの人でしたが『経過は分っているけど貴方は動いた方が良い』と説得され、命令に従いました。」

地方公務員の定めであろう、公務員はあくまでも行政機能の一部である事を求められる。独自の判断は人事権を持つ首長の前では無力である。しかし、全職員が職場からいなくなるという一つの事件はチェンマイ県では有名になった。

その後、その首長は二度と選挙で勝つ事はなかったと言う。しかし良い事をしたはずの彼女が受けたダメージは大きかった。

「その後、同じチェンマイ県ボンタン・タンボン自治体で助役のポストが空いたので助役として 3 ヶ月働きました。しかしここは家から遠いので通いきれず、直ぐに移動願いを出しました。まあ前職と同じチェンマイ県と言うことで、雰囲気が働きにくかったという事もありましたし･･･」

結局追われる様に次の職場も辞職。その後、彼女は自宅（ランパン市）に程なく近いコカ・タンボン自治体助役のポストが空いた事を知るのである。

「2000 年 10 月にコカ・タンボン自治体に移動してきました。コカを選んだ理由は、前の職場は都市型

で利害調整が難しかった。でもコカは農業中心の村だし、不正は殆どないのでは？と期待してきました。」

曲がった事が嫌いな彼女。その性格は幼少の頃から変わらないという。彼女にとって一番大きな影響を受けた人物は父親だという。彼女の父親は現在退役しているが、以前は国境警察で働いていた。

世界中が冷戦構造に組み込まれていた 1970 年代、タイもその例外ではなかった。ベトナム、ラオスと共産主義国家が存在したインドシナ半島。カンボジアは内戦、ミャンマーは軍事政権と言う事でタイは西側陣営の防波堤としての位置付けにあった。

そんな時代背景の中、彼女の父親は共産ゲリラの取り締まりを行なっていた。いつ自分の身に危険が降りかかるか分らない、そんな状況にある父親を目にして育った彼女は自然と精神的に強くなったのかもしれない。

「法学部を目指したのは、郡の助役になりたかったのが理由です。だから一度は政治学部進学を考えたのですが、父親が政治学部に行くと方向性が限られるから、違う学部に行く方がよいと言ったので、法学部を選びました。父親は厳しい人でした。でも叩かれた事は一度も覚えていません。相談事は何でも出来ますよ。」

彼女はスコタイタマティラート大学（通信）法学部を出た後にランパン市で弁護士として勤務した経験を持つ。しかし長くは続かず、約 3 年間で弁護士という仕事に疑問を持ったそうである。

「弁護士は全ての事象を把握して、多少オブラートをかけて業務を行なうものです。その時、父親が『貴方の性格では弁護士をやるにはまっすぐすぎる』と転職を進め、その時丁度助役試験があることを知り、その試験を受けました。」

正論を唱える人は組織から疎まれる事が多い。よき理解者があってこそ、その人が十分に生かされる。彼女はそういった意味でも今回のプロジェクト活動を通じて大きなものを得たという。

「プロジェクト開始以前、コカ郡ではごみ問題には大きな関心がありました。ただそれに関しての知識がなかった。例えばコカ・タンボン自治体内の第四村が地域のごみ集積場に近いという事があり、クレームがありました。これの解決の為に何度も第四村に行って住民集会を開きましたが、当時知識が無かった為、解決には至りませんでした。」

一人で出来る事には限界がある。。。そう感じた彼女はプロジェクトへの参加は即決したという。助役としてコカ・タンボン自治体で働いている彼女に JICA プロジェクトの話を持ってきたのはコカ町長だったという。

「ごみの集積場は何度も粘り強い交渉の末、住民の OK を貰いました。でもそのプロポーザルを郡に提出したのですが、担当者から水質は？などいろいろ自分が判っていなかった事が多く聞かれ、返答に苦慮しました。そんな時コカ町長からプロジェクトの話をされたのです。」

ボンゴット氏は2007年7月よりプロジェクトの研修員として日本の自治体を訪問した。最新設備に目を奪われる多くの研修員と違い、彼女は別の視点を学んだという。

「日本では省エネに関することや、自転車駐輪場、身障者の為の行政事務など多くのことを学んだ。でも私が一番学んだ事は『既存のものをどう生かすか』という意識を持つことです。」

センター活動で目を引いたのは3人の女性助役達の仲の良さだった。この助役達がセンター長であるコカ町長を支え、活動の幅を広げていった。

「助役たちの関係はもともと良かったんですよ。他の 2 人の助役とはセンター設立前から知り合いでした。でもセンター活動を行ってから、始めて仲間意識が生まれ、本当にプライベートでも仲良くなりました。今では映画を見に行ったり食事に一緒に行ったこともありますよ。」

コカ郡のセンター活動はどちらかと言うと日本の協議会方式の自治体間協力に似ている。センターの会合によって共通のビジョンを持ち、各参加自治体はそのビジョンに基づき、自分達の自治体の事情に合わせて、その実現を行なう。つまり無理をしない活動が出来るのである。

コカ・タンボン自治体出身ではない彼女。しかし彼女には信念がある【背伸びをせず、住民とひたすら一緒に考える。そうすれば路は必ず開ける】と。

「コカは本当にクリーンな自治体です。住民間や地域で問題や障害が起きる事を私は気にしません。むしろ自分の目指すのは地元の住民と働く事なので、地域内の問題を一緒に解決するという喜びがあります。」

「住民の人は私が言った事の理解が早いので、仕事をしていてとても楽しいです。まるで友人と一緒にいつも仕事をしている感覚です。私から住民に対しての質問はとてもシンプルにしています。『分るか、分らないか、出来るか、出来ないか』これを聞いて、じゃあどうしよう、と一緒に考えます。」

全てが順調なわけではない。日本同様、タイでも都市化による地域の団結は薄れ、その余波は都市化をしていない農村にも影響を及ぼしている。つまり地域の問題を地域が解決する意識が低いのである。

住民集会も以前ほど人が集まらなくなったという。それでも彼女は様々な住民を集会に参加させる工夫をしている。集会にさえ呼べば話し合う機会が持て、意識を変えられると彼女は言う。

「住民集会をやる上で第一村、第四村という人口規模の大きな村では集会が難しいです。住民集会に人を集めるにはいろいろ工夫しています。例えば美容師を呼んで子供の髪の毛を無料で切るサー

ビスをしたり、毛布を無料で配布するサービスをしたり、または電気技師を呼んで電化製品の修理や無料でチェックしたりしています。」

そんな彼女の部下の大半は男性である。女性が男性部下を使いこなすのにも様々な苦労があるであろう。

「通常北部出身の人は性格的に穏やかです。男性の部下が女性上司を受け入れられる雰囲気があり仕事はやりやすいですよ。私は男性に囲まれて学生時代を過ごしたので慣れていました。」

助役は天職と言い切る彼女。そんな彼女も有形無形のストレスがあるのであろう。多くの休日はランパン市にある実家で両親と4匹の犬と過ごす。「引きこもり状態かな･･･」という彼女。少年院で働く弟、国境警察として働く妹に代わって子供達の親代わりとして 3 人の甥っ子の面倒も看ている。

「妹に対しては何でも相談できます。仕事の事は両親に相談をします。基本的にアドヴァイスという意味では父親に聞きます。母親からは励ましを頂いています。」

家族の支えがあるから、自分が自分らしく振舞える。

「妹達の子供が家にいますので、彼らに本を読んであげたりしています。土日は外に出るのは面倒で。。。読む本の分野は問いません。食に関わるものに興味がありますね。いわゆる料理の造り方と言うよりも、食文化の背景を知る事が楽しいです。」

家族の事を話す彼女からはいつもの早口が消え、穏やかな笑顔を見ることが出来る。子供や犬との関わりが彼女の心を浄化し、気力を養ってくれるのであろう。

「うちの首長を動物に例えると大型犬かな。ゴールデンリトリバーみたいに冗談好きで人懐っこいタイプですよ。」

強い信念と気持ちの余裕、この両方を兼ね備えた今の彼女からは、かつてのトラブルメーカーの印象は微塵も感じられない。これも活動を通じて多くの理解者を得ることが出来たゆえであろう。

3-5. 「希望を持って生きられる社会を作りたい」
コカ郡コカ町長　ペンパック氏の場合

「子供の頃はあまり目立たない子供でした。まさかこのような職業に就くとは思えないような子供でしたよ。とは言え 3 人姉妹の中では一番腕白だったかも知れません。庭の木に登ったのも私くらいかな？」

このように語るコカ町長は町長職 2 期目、失礼ながら何処から見ても普通の女性である。いやどちらかと言えばおしゃれな都会の大学生といった服の着こなし。とても可愛い雰囲気を持つ女性である。

「私ピンク色が好きなんですよ」町長室に入るとそこはまるで託児所のごとく、多くのぬいぐるみ、クッション、ピンク色のカーテン。部屋の片隅においてあるエレクトーンには開いたままのマザーグースの楽譜。。。とても自治体の長の部屋とは思えない。

ランパン県コカ郡コカ町。人口約 5100 人、いにしえのランナー王国の首都ランパンに位置する旧都である。コカ町にも古い古刹が至る所に在り、現在も線香の香りが途切れる事を知らないほど住民の信仰心は厚い。しかしタイでは出稼ぎの町として知られる貧しい地方である。

町の中心から離れたところには 1200 年ごろに建設された木造寺院がある。その太い柱は森林が豊かだった頃の名残である。今でも至る所に雑木林が見られ、ほのぼのとした田園風景が広がっている。郊外にはトレードマークのニワトリの柄で有名な陶器工場が無数に立ち並ぶ。

「2001 年当時の町長は銃殺されました。今でもその犯人は捕まっていませんが、どうも利権絡みで殺されたという事だそうです」。唐突に語られる激しい言葉。それは彼女が副町長を辞任した直後の事であった。

「当時、町長の方針と合わないと感じ、副町長を辞任しました。当時の町長は昔ながらの政治スタイルの人だったので、ついていけなくなったのです」。当時財政と教育の担当副町長職を務めていた彼女は辞任後、大学の修士課程に通い、そこで仲間を得て、自分の新しい政党を作った。

「私は住民参加型の政治を進めたかったんです。本当のクリーンな政治は地方から行なえば、中央も変わると信じています」。その凛々しい眉毛は芯の強さを表しているかの様である。信念が無ければ政治家など出来ないであろう。

今までイメージを払拭したい。。。町長室のキャラクターグッズはその象徴なのかもしれない。現在のコカ町役場は、女性ならではの柔らかさと華やかさのイメージを持ち、以前物々しい事件があった事など微塵も感じさせない。

コカ町ではプロジェクト開始以前より非公式な自治体間協力を日常的に行なっていた。これは自治体同士が文書を交わすわけではなく、単に首長同士の口約束で行われていた。主に干ばつや山火事などの自然災害が起きたときに協力し合いましょうといった類のものである。この際、基本的に助け合いに関わる費用は無償であった。

「コカ町はこのような非公式の要請にいつも真摯に応じてきました。でも最近では、『道路工事用に水を撒きたい』と給水車の出動を要請されたりします。これらのガソリン代等の費用負担が馬鹿にならず困っていました。議会にもちゃんと説明しなければいけないし。。。」公費支出の透明性を公約に掲げていた彼女にとっては、こうした非公式の約束は重荷であった。

近年ごみ問題は牧歌的に見えるコカ町にさえ深刻な問題となっていた。特に埋め立てによるごみ処理方式が一般的なタイの自治体は、その用地確保、処分場の近隣対策などに多くの問題を抱えている。

「廃棄物処理を重視しようと思ったきっかけは自分にとってとても難しい仕事だと思ったからです。町が持っている最終処分場に昔から4つの自治体がごみを捨てています。つまり自分の自治体だけでごみの分別を行ない、ごみの総量を減らしても意味が無いと思ったんです。そこで他の3つの自治体に自治体間協力の声をかけました。」

そんな彼女だが、ごみ問題に特別な知識や経験があるわけではなく、センター活動も最初は試行錯誤であった。

「最初は試しにセント村にてごみ分別をやってみたんです。すると、これが思いのほかうまく行ったのでごみ分別は出来ると確信しました。私はごみの問題は一つの自治体のみの問題ではなく地域共通の問題であると確信しています。これを 3 つの自治体に言う事から始めました」。

プロジェクトの活動を始める前までは、ごみの最終処分場は単なる空き地であった。誰が管理しているわけでもなく、自治体の収集車以外の車による不法投棄も多かった。

「共通の問題としてごみ問題が4つの自治体で認識された後に、やっとごみの最終処分場に塀とゲートを作る事が出来ました。4つの自治体で利用するルールが決められたからこそ、管理ができるんです。」

ごみ処分場の改善は目に見える成果として住民の知るところとなった。目に見える変化は住民にとって非常に分りやすい。以前は週に 5 回ごみ収集をしていた町の収集車も今では週 2 回の回収で事足りるという。

「ごみの総量を減らさないと物事の解決にはならないんです。その事を住民に分ってもらう為に住民集会を何度も開きました。コカ町は全ての村で3回づつ、他の自治体の住民集会も 1 回は必ず出席しています。」

住民集会は通常夜の 7 時もしくは 8 時から行なわれる。住民にとっては一種のお祭り騒ぎ、集会が終わるのは早くても夜の 10 時、遅ければお酒も入って日が変わる。住民にとっては数ヶ月に一度のハレの日であろうが、一時期、町長にとっては毎日の事、体力的にもきつい日々が続いた。

「住民が公共意識を持つためには、先ずは住民がそれぞれの地域の当事者だという意識を持たせなければいけないと考えている、自分達で解決する、この意識が公共意識に繋がるのではないか。それを必死に説いて回りました。」

このように精力的に動き回るペンパック町長。地元出身ゆえに町の隅々まで把握していると思いきや、実は政治家になるまではあまり町の事は知らなかったという。

「正直なところ、子供の頃は勉強ばかりで知人がここには居ませんでした。この仕事を始めてから知人が増えました。学校に行っていたときにはお母さんは学校で、お父さんはガソリンスタンドで働いていました。家に帰るのはお母さんの仕事が終わった後なのでもう暗くなっていて、近所の事もよくわからなかった。セント村やコカ村の人たちともこの仕事を始め

てから仲良くなりました。」

彼女は小中高ともランパン市で学んだ。そして大学はチェンマイ。本格的にコカ町に住んでいるという意識を持ったのは大学卒業後だという。

「ランパン県にも家を 3 件ほど持っていました。父親が家畜業を営んでいた時期もあり、ランパン市にも住んでいた事もありました。父親は家畜の肥料会社を経営していたのですが途中で、飼料から石油を扱う事業にシフトしました。」

大学卒業後、彼女は経営するガソリンスタンドを手伝いながら、ビジネスの基礎を学んだ。そしてゆっくりと地元に溶け込んでいった。

現在、彼女の父親は事業を辞め、彼女が設立した健康福祉関係の NGO の理事長を勤める。母親はコカ郡公衆衛生財団で理事長をしている。どちらの財団も貧困層を助ける仕事をしている。このような公共意識の高い家族の元で彼女は育ったのである。

「今でも貧困家庭は多いです。たまに彼らへの食事の配給もしています。町では住民の報告に基づいて貧乏かつ DV を受けているケースを、ボランティアが視察に行き、300 バーツ(月)の支援金を上げている。県補償を充当するのが良いと思うのでけど、それを支給するにはとても時間がかかり、緊急性を要する場合が多いので、市で支援している。彼らが希望を失わないように元気付けしています。」

希望を持つ。人間の本当の貧困状態は希望すら持てない状態だとある学者が言っているが、まさに生活の保障がない、日々の暮らしさえおぼつかない状態では人間が希望を持つことは難しいであろう。

「貧困家庭は農業を生業としていたわけではありません。昔から貧乏。路上生活者、日雇い労働者が多い。一人が貧乏だと親戚が貧乏。一つケースは男性同士の兄弟、60 歳以上、家も無い。今更収入を得る方法も無い。私はそういう人たちに人間として希望を持ってもらう手助けが出来ればそれでいいのです。」

彼女は、住民は私の家族ですという表現を頻繁に繰り返す。「地方政治は親戚が多いほうが有利だけど、うちは親戚が少ない分、住民の皆さんが私の家族です」と。

「活動の副産物としていろいろな住民の参加、新しいグループの結成などにより、以前よりコミュニティ力が強化されたのではと感じます。それがコカ郡の住み心地良さに繋がればと考えています。」

コカ町では、自治体間協力の活動は住民の繋がりを取り戻す良いきっかけになったと評価されている。ごみ問題は行政の仕事、私達の問題ではないと考えていた住民の意識を大きく変えた。住民自身が地域の問題の当事者になる、その事の重要性を認識した住民はより活動的になり、地域の好循

環を生んでいく。そのきっかけが JICA のプロジェクトであったと言う。

「地方自治には住民参加が無ければならない要素だと思います。また地方自治は住民が主体でなければならないとも感じています。そして首長には良い人を選べば住民の生活も発展するし、これらは全て住民の選択の結果です。」

地域の主人公はあくまでも住民と言い切る彼女。住民が主体になって行なう自治体間協力活動は人間の繋がりを取り戻す為の処方だと彼女は考えている。そして人が人として尊厳を持って、希望を持って生きられる、そんなコカ町にしたい、その願いの為に日々働いているのだと言う。

「理論だけを振りかざす人は嫌いです。私は住民に近い存在でありたい。そして将来的には地方がより住みやすく、よくなる事によって国が変わっていけばと考えています」彼女のような政治家が増えればタイの政治も大きく変わるであろう。

ここ数年浮いた話がないなあと町の職員は彼女の事を言う。

「結婚はまだ先かな。今の私は仕事の事で手一杯で、気持ちの余裕はありません。いつか聞かれるんじゃないかと思っていたわよ！」

政治家の顔と普通のお嬢さんの顔、2つの顔を持つからこそ彼女はとても魅力的なのであろう。結婚はまだ先だろうなあと思うのと同時に【普通感覚】を持って仕事をする彼女にプロ意識を感じた瞬間であった。

4. あとがき

私見ですが、JICA の仕事は単に技術やテクニックを教えるだけではありません。その技術やテクニックの本来の目的や【ものつくりの心】を相手国に伝え、そして相手の立場に合った形で応用していくことにあります。私はこの事を今回の業務を通じて多くのサポートを与えてくださった JICA タイ事務所所長に学びました。

今回の自治体間協力プロジェクトは目に見える成果が多いプロジェクトでした。しかしながらそれは氷山の一角であり、確かに制度構築の面での大きな成果は示しやすいのですが、CD（キャパシティビルディング）や HD（人間開発）の観点からの成果を示すのは非常に難しいことです。

今回はストーリーテリングという形で、通常の業務からはなれた形で 5 名の関係者にインタビューを試みた。彼らが口にするストーリーは驚きと発見の連続でありました。またプロジェクトの波及効果が当事者の言葉で語られることにより改めてその効果を確認する事ができました。

「思い」は人それぞれです。しかしその思いによって人は動きます。その一つ一つの思いを記録に残し、プロジェクトの経緯やその成功/失敗要因を共有することの重要性を今回の作業を通じて感じることが出来ました。

まさにプロジェクトは人、人的要素によってその成否が左右されるのだと改めて実感しました。今回のプロジェクトの成果は JICA の 10 数年間の継続した協力のおかげだと考えています。援助する側も歴代の関係者の繋がりがあり、そして暖かくプロジェクトを側面サポートする。こうした人と人との繋がりの大切さを改めてプロジェクトの仕事を通じて学ぶ事が出来ました。

最後にこうした機会を与えてくださった、日本政府、並びに JICA、特に JICA タイ事務所所長には深く感謝しております。

以上